様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月　１ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１２４５７

研究課題名（和文）ホスト国における移民の社会的統合―「ウィンドラッシュの娘たち」の経験から

研究課題名（英文）The Daughters of the Windrush: Social Integration of the Immigrants in the Host Countries

研究代表者
堀内　真由美（Horiuchi, Mayumi）

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：６０４４９８３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、西インド諸島からイギリスへの労働移民「ウィンドラッシュ世代」二世に注目し、世界規模で展開された植民地支配の歴史を紐解きつつ、日本社会も含めた今日の移民をめぐる諸問題解決への有効な議論を喚起することだった。コロナ禍のため、予定していたイギリスと西インド諸島への資料調査が実現できなかったが、これまでの研究でご縁を得た「ウィンドラッシュの娘たち」の１人である女性との交流と、西インド大学文学部刊行の学術誌の講読により、移民二世である彼女たちが体験した「本国イギリス」での苛烈な差別や排除の詳細と、長じて彼女たちが組織したイギリスにおける「ブラック・フェミニズム」の思想と運動が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「ウィンドラッシュの娘たち」の経験は、これまで、「本国」イギリスでも広く知られてきたとは言い難かった。研究代表者は、当事者の一人から、イギリスでの過酷な体験、教師として同胞の子どもたちに実践した教育理念、生まれ故郷ジャマイカに戻ってきた理由、そしてジャマイカでの教育実践を、直接聞くことができた。これにより、収集した書物やアーカイブに保存されている「娘たち」の活動記録と合わせ、第二次大戦後のイギリスにおける移民二世の体験の詳細を、書物にまとめることができた。書籍化により、日本を含む労働移民（外国人労働者）を受け入れるホスト国社会に期待される、歴史認識とはどのようなものかを広く示せたと考える。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to challenge the argument over emigrant labourers who often face difficulties in their host country including Japan, with examination into the history of colonisation. I made a focus mainly on so called the 'Windrush generation', who came to work from the British West Indies to the UK just after the 2nd world war. As the coronavirus pandemic made impossible to go abroad for collecting the materials and meeting the people concerned, I was fortunately able to keep in touch with one of the daughters of the Windrush generation living now in Jamaica. Being helped by a lot of advice and written materials sent from her, I managed to demonstrate the details of the social and political movement of daughters of the Windrush who experienced indescribable racism in the UK.

研究分野：ジェンダー論（史）

キーワード：フェミニズム　ブラック・フェミニズム　ウィンドラッシュ世代　ウィンドラッシュの娘たち　避妊薬禁止運動　カリキュラムの脱植民地化　ジャマイカ　ブリクストン事件

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1)コロナ禍が露わにした問題

本研究を開始した2020年春は、コロナウィルスによる肺炎の感染拡大、いわゆる「コロナ禍」が全世界を席捲した時期と重なる。各国で感染が拡大していくに伴い、感染者への差別感情や、手厚い医療が受けられる人々とそうでない人々の間の格差、医療・物流などに従事する「エッセンシャル・ワーカー」と呼ばれる人々の労働の過酷さや待遇の劣悪さが露呈した。なかでも、ニューカマーである移民労働者や、古くから当該地に住まい市民権を得ていたはずの「肌の色の異なる市民」への差別と排除の現実が、改めて人々の前に立ち現れた時期だった。

(2)歴史問題に立ち返る運動の再燃

コロナ禍が世界を席巻し始めた2020年春は、アメリカでの白人警官による黒人男性死亡事件の衝撃が世界を駆けめぐった時期でもあった。すでに数年前から活発になっていたBlack Lives Matter(BLM)運動がこの事件をきっかけに再燃し、同じように国内に黒人差別問題を抱える欧州の国々で、国家的黒人差別への抗議運動が一気に広がった。研究代表者の考察対象国の一つであるイギリスでは、奴隷貿易で富を築いた「偉人」たちの像が破壊されるという事件が頻発した。これは、黒人がイギリスに存在するに至った理由、つまり過去の奴隷貿易に端を発する、アフリカからの大規模かつ長期間における黒人たちの強制的移動という歴史に立ち返り、現在も続く黒人への差別と抑圧がいかに非人道的であるかを示すこととなった。この運動には、戦後の労働力不足を支えた「ウィンドラッシュ世代」の二世、三世や、アフリカ諸国からの移民、そしてかれらの苦難を「我々の歴史の一部」だと自認する白人たちが加わった。

本研究の開始直前には予想すらしなかったこのような事態は、「世界的規模で進行するヒトの移動に伴い発生する諸問題の解決」という、研究代表者が設定していた本研究課題への速やかな取り組みを促す原動力の一つとなった。

２．研究の目的

本研究では、第二次世界大戦直後、宗主国であるイギリスにやってきた「ウィンドラッシュ世代」と呼ばれる、当時の英領西インド諸島からの労働移民とその子どもたち世代を考察対象とし、今日も増加し続ける外国人労働者に対して、受け入れ側であるホスト国社会がどのような認識を持って、かれらとの共存を図ればよいのかを考え、そのことを広く提起することにあった。

今日、多くの移民労働力に依存する国において、その国で生まれ教育を受けながらも低賃金労働にあえぐ移民二世、三世たちの多くは、かつて世界規模で展開した植民地主義に根差すヒトの強制的移動という歴史を、その来歴に持つ。しかし、かれらは、その歴史の忘却とともに進行するホスト国の誤解や無知にさらされ、日常的な差別や排除を被っている。

本研究は、「ウィンドラッシュ世代」とその子どもたち、とりわけ娘たちに考察の焦点を当て、かつて支配した側にあった国を含めた今日の移民のホスト国において、移民が日常的に被る差別的処遇問題への解決に資する議論の構築を目的とした。

３．研究の方法

研究開始直前まで、本研究は、主に旧宗主国であるイギリスと、イギリスに労働移民を送り出した側である旧英領西インド諸島を定期的に訪れ、資料調査と関係者への聞き取りを土台に進められる予定だった。しかし、開始直後の春に、コロナ禍のため海外渡航が困難な状況になっただけでなく、感染防止の必要から、国内における資料調査のための移動も容易にはいかない時期が続いた。そこで、研究方法の全面的な見直しを行なった。

(1)一年目前半における研究方法

本研究の開始直前の2020年２月に、ジャマイカの西インド大学モナ・キャンパス内で、「ウィンドラッシュ世代」の娘たちにあたる人物で、長じてはイギリス初の「ブラック・フェミニズム」の全国組織を立ち上げたメンバーの一人、ベヴァリー・ブライアン博士への聞き取りを行った。事前に、ブライアン博士から、インタビューがスムーズに行えるようにとの配慮から、自伝的論文を数本、研究代表者に送られてきていた。聞き取り調査から帰国し、本研究を開始する際、録音内容を文字に起こしながら自伝的論文を再読し、また、数年前からイギリスで収集していた1970年代の「ブラック・フェミニズム」の活動記録も振り返った。

時間をかけて、これまでの「復習」をしたことで、初等学校途中からイギリスの学校に編入した西インド労働移民の子どもたちが直面した差別や排除、教育の場での差別と排除がもたらす雇用機会からの排除、その結果としての失業や低賃金労働、そして社会の底辺に置かれたかれらへのさらなる差別感情やときに暴力化する排除の姿勢、と、一連の問題が明確に理解できるようになった。

研究代表者は、本研究一年目に研究環境における閉そく感に苛まれた一方で、本研究で成すべ

き事柄を明確に意識できるようになった。コロナ禍の世界で再び立ち現れた移民差別や民族差別の現実が報道されるたび、「ウィンドラッシュ世代」とその子どもたちが経験してきた現代史を、誤解を恐れずに言うならば、「人々が差別という現実に敏感になっているこの時期を逃さず広く知らしめなければ」と決意したのである。

(2)偶然がもたらしたその後の展開と研究方法

自宅での文献講読と新たに発見した事実関係の確認に終始していた本研究一年目の中頃に、研究代表者の前著（『大英帝国の女教師――イギリス女子教育と植民地』2008）を読んで興味を持ったという筑摩書房の編集者氏から、ある要望を受けた。前著では、実在のイギリス女教師たちの本国および帝国内での活動記録から、19 世紀フェミニズムの薫陶を受けた女教師たちが無意識に植民地主義を受け入れていたことを明らかにした。この前著の内容に、同時代の少女小説のなかに現れる「フィクションの女教師たち」を登場させ、実在の女教師たちとともに、世界一周するような話を書けないだろうか。編集氏の要望はこのようなものだった。

数回のやり取りの後、研究代表者は、「小公女セーラ」のインドでの幼少期体験とロンドンで受けた 19 世紀半ばの女子教育の実情や、イギリス連邦カナダの「赤毛のアン」がどのようなプロセスで女教師となり、どう生徒と対峙したかなど、現実の女教師たちと伴走させるアイデアを出した後、ベヴァリー・ブライアン博士の女教師としての長い旅路を加えたいという希望を編集者氏に語った。ブライアン博士に彼女の自伝的トピックを著作に盛り込むことへの許可を得た後、編集氏からもプランへの快諾を得ることができた。結局、本研究の二年目は、著書執筆のための作業をしながら本研究の目的遂行をめざすという、二兎を追うものになった。その結果、19 世紀末から第二次大戦まで、植民地間を指導しながら移動した本国白人女教師たちの背後に、彼女たちの指導を受け、自らも教職についた西インド植民地の被支配者たるアフロ系少女たちの存在が明らかになった。「ブライアン博士誕生」の前に、すでに植民地内で基礎教育を担うアフロ系女性がいたのである。

本国イギリスにおける西インド移民、とりわけ移民二世の女性たちに注目していた本研究は、著書の執筆作業という、またも研究開始時には予想していなかった事態をとおして、本国への移動を促した彼女たちの故郷である植民地側の事情、とくに植民地社会におけるアフロ系女性の経験や志向の一端を明らかにすることとなった。西欧の女性運動史から女性の地位向上の変遷を捉える傾向が根強いため、英領西インド植民地におけるアフロ系女性の自立心や自尊心の醸成過程を見逃しがちであったことにも気づかされた。

西インド植民地生まれでイギリス育ちの「肌の色の異なる女教師」が、差別や排除に晒されながらも、志ある白人労働者階級の女教師たちから援助を受け、高等教育を経て「ブラック女教師」となり、カリキュラムの「脱植民地化」を成し遂げ、生まれ故郷のジャマイカに永住帰国し、さらに独立後の社会を生きる子どもたちの自立を促す教育へと心血を注ぐ。英領世界を一周した女教師の物語をブライアン博士の半生で完結させることができた。

(3)著作執筆以降の研究方法

著作執筆作業の後半に、科研費支出に当初計上していた「資料調査渡航費」を、書籍資料購入に充てることができると助言を受けた。海外資料調査の際、かねてより複写していた西インド大学文学部編集の学術文芸季刊誌『カリビアン・クォータリー』の既刊分の入手について、同大学図書館司書で、資料についてたびたびメールでの相談に乗ってくださっているセルウィン・ルドルフ氏に尋ねたところ、直接出版社を通せば可能との回答を得た。西インド大学から出版委託を受けているイギリスの出版社の日本支社に取り次いでもらった結果、創刊時(1949 年)から 10 数年分を購入できるとのことで、研究代表者の勤務校生協の助力で注文が通り、本研究の最終年度開始時に入手することができた。

『カリビアン・クォータリー』の刊行当初の数号分を精読することで、英領下のジャマイカに「ロンドン大学海外分校」として設立された現・西インド大学の現地スタッフらが、同誌刊行に込めた「学術の独立」と「文化の独立」の志が確認できた。またそのことを通して、多くがイギリス育ちである「ウィンドラッシュの娘たち」が、自身のルーツに誇りを持ち、のちの「ブラック・フェミニズム」の思想と運動につなげていった過程、つまり、独立前の植民地ですでに培われていた自立心、差別を不当なものとする正義感、差別に抵抗する強い意志が、その後「本国」で遺憾なく発揮されたことが、研究代表者にも心から納得できたのである。

４．研究成果

既述のように、本研究は、コロナウィルスによる新型肺炎の世界的大流行の長期化により、現地に直接赴き人と資料にあたるという研究方法を、三か年の研究期間で実施することはできなかった。一方で、自宅作業を基本とする資料の精査、電子メールやオンライン通信を使ったイギリス、ジャマイカの関係者らとの交流の維持、同様にオンライン上での国内研究者らとの意見交換など、可能な限り多様な手段を用いて本研究を遂行することができた。その具体的成果として、以下に主要なもの列記する。

(1)単著刊行の反響

本研究二年目に行った著書執筆作業は、幸いにも『女教師たちの世界一周――小公女セーラか

らブラック・フェミニズムまで』(2022,2,筑摩書房）として刊行できた。刊行から間もなく、複数の地方紙、経済誌からオンライン取材を受けた（東京新聞、中日新聞、週刊『東洋経済』、週刊『エコノミスト』)。取材の申し込みに、当初、研究代表者には、その目的が計りかねた。しかし、すべての完成記事を目にしたとき、日本における「女性活躍促進」という、いわば「国策としてのフェミニズム」の来歴を明確にしておく必要、つまりこれまでの女性への差別と抑圧の歴史をきちんと振り返っておこうという記者（いずれも男性）たちの真摯な姿勢が反映されていたことに気づいた。おそらく、取材記者諸氏にとって「ブラック・フェミニズム」という概念は真新しいものだったと推察するのだが、研究代表者が取材中繰り返した「女性の権利を主張して運動を引っ張っていったリーダーたちにも、人種主義や植民地主義の内面化が明らかな時代があった」という説明には、一定の理解が得られたと手ごたえを感じている。

イギリス植民地で起こったことは、かつての日本の支配地域でも起こったかもしれないのだと想像してもらえるか。研究代表者の本研究の大きな目的の一つが、この「支配－被支配の現代史の共有」であったことから、拙著に関する記事が、日刊紙二紙と経済誌二誌、とりわけ後者の主な読者と思われる「中高年男性ビジネスパーソン」の目に触れる機会を得たことは、拙著刊行の成果の一つであり、同時に本研究の成果の一部であると言えよう。

(2)その他の論文成果

単著の刊行の他、本研究の成果の一部を著した論考が二本ある。一つは「イギリス移民女性運動「史」――1970 年代「ブラック女性」の避妊薬禁止運動」、もう一つが「「カリブ海人の歴史」を求めて――*Caribbean Quarterly*創刊号(1949)を中心に」である。

前者は、本研究の一年目に、ブライアン博士らイギリスにおける「ブラック・フェミニズム」を主導していた「ウィンドラッシュの娘たち」の運動の一端を紹介したものである。1970 年代に実施された「西側先進国」による、アフリカを中心とした「途上国」への経済援助に組み込まれた人口抑制政策を、黒人人口の減少を意図した人種差別政策であると見抜き、発がん性が疑われた避妊薬の禁止運動を展開していく経緯と結果を追ったものである。

後者は、既述のように、科研費に計上していた海外渡航費を書籍資料に転用して入手が可能になった、西インド・カリブ海地域唯一の学術文芸誌『カリビアン・クォータリー』創刊時に掲載された複数の論文に注目し、政治的独立を目指していたジャマイカほか英領西インド諸島における文化的、学術的独立への熱望と、「英帝国の歴史」に代わる「我々の歴史」創造への苦闘を明らかにした。

(3)フェミニズム・女性史研究からの注目

本研究の成果の一つである単著『女教師たちの世界一周』は、女子教育史研究、19 世紀後半から女性参政権獲得までの、いわゆる「第一波フェミニズム」研究からも関心を寄せていただいた。本研究最終年である 2022 年 12 月の対面式を取り入れた「イギリス女性史研究会」では、招聘講演者として、拙著の概略とともに研究代表者が「女性史研究」に至った道のりについて話をする機会を与えられた。これまで注目されてこなかった「ウィンドラッシュ世代」の二世にあたるイギリス育ちのブラック女性の経験について、参加者から高い関心が寄せられたことを実感できた。

この講演の終了時には、すでに次回の研究会への報告を依頼されるという、うれしい誤算もあった。2023 年 6 月の同研究会では、「インターセクショナリティ」（交差性）をキーワードとして女性史研究を見直すという趣旨でシンポジウムが開催される。研究代表者は、「ブラック・フェミニズム」と「交差性」との関係について報告するよう要望されている。前回の招聘講演で言及した、「ウィンドラッシュの娘たち」の経験を、改めて、「交差性」というキーワードで読み解くことになる。ジェンダー、「人種」、階級という人間を分ける「範疇」すなわち「セクション」がある。例えば「女性」といっても白人なのか黒人なのか、中産階級なのか労働者階級なのかで、彼女が受ける差別や抑圧は全く異なるものとなる。それら「セクション」が交差する存在――「黒人労働者階級女性」の経験とはどういうものであったのか、それを日本という社会で高等教育に携わる女性たちが「理解」できるのか、あるいは理解に近づくには何が必要なのか。

今回のシンポジウムでの研究代表者への報告依頼は、少なくとも「女性」を一括りにせず、「日本に生まれ育った高学歴女性」という自覚をもって、これまでのフェミニズムやフェミニズム運動をとらえ直す時期に来ているという、日本のフェミニズム・女性史研究から発せられた問題意識の大きさの表われであると考える。広く社会における議論の喚起、という本研究の最終的な目的の達成にはまだ時間が必要であることは明白だが、一方で、フェミニズム・女性史研究という本研究の母体にあたる領域において、「我々」とは言語や文化を異にする「彼女たち」、その彼女たちの中から生まれてきた思想と社会運動の来歴を知り共有することが「当たり前」になる、その前兆をもたらしたことは本研究の成果であると言えよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>堀内　真由美 | ４．巻<br>第70輯 |
| ２．論文標題<br>イギリス移民女性運動「史」―1970年代「ブラック女性」の避妊薬禁止運動 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>『愛知教育大学研究報告』（人文・社会科学編） | ６．最初と最後の頁<br>1-9 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>堀内　真由美 | ４．巻<br>第72輯 |
| ２．論文標題<br>「カリブ海人の歴史」を求めてーCaribbean Quarterly創刊号（1949）を中心に | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>『愛知教育大学研究報告』（人文・社会科学編） | ６．最初と最後の頁<br>1-9 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>堀内　真由美 |
| ２．発表標題<br>「カリキュラムの脱植民地化」―知られざる「ブラック女教師」の物語 |
| ３．学会等名<br>大阪大学比較文学会シンポジウム「帝国を掘り崩す知―女性と教育をめぐるトランスナショナルなネットワーク」 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>堀内　真由美 |
| ２．発表標題<br>『女教師たちの世界一周』』と「女性史」までの寄り道・回り道・迷い道 |
| ３．学会等名<br>イギリス女性史研究会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2022年 |

〔図書〕　計1件

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>堀内　真由美 | 4．発行年<br>2022年 |
| 2．出版社<br>筑摩書房 | 5．総ページ数<br>272 |
| 3．書名<br>『女教師たちの世界一小公女セーラからブラック・フェミニズムまで』 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|